

に惡末の字を當てゝある。末の字がMEI又はそれに近きBASの音を表はし、末羅にてバヌラの音を表はし得る筈である。

※ ※ ※ ※ ※

ヒルト及びロツクヒルの『諸蕃志』に就いてはペリヨが可なり綿密な批評を加へて、千九百十二年の『通報』に載せてあつて、參考すべき所が多い。吾が輩は成るべくペリヨの言及して居らぬ點に就いて批評した積りである。(三月七日)

柯劭忞の『新元史帖木兒傳』

文學博士 桑原隲藏

一 清朝の學者は元史の研鑽に身を委ねた人が多い。これには種々の原因がある。

(一) 清朝は塞外から起つた關係上、華夷の區別を認めぬ。清朝に人となつた學者は、明時代の學者

の如く、遼、金、元の三代を夷狄として、極端に排斥せぬ。元の雄圖に對しても、十分の同情を有つて居る。

(二) 内外蒙古、天山南北兩路等の塞外の地は擧げて清朝の版圖に歸した結果、この方面の地理古蹟等が明瞭になり、元史研鑽の便宜を得ることが多い。

(三) 考證學といふ精緻な學風が開けると共に、學者の間に、歴代正史中尤も粗笨どの評を受けた『元史』を完備せんとする志望を生じて來た。

(四) 近年になつて、西洋や日本に於ける蒙古史研究の盛なることが、尠からず支那の學者に刺戟を與へ、西洋や日本の學者から得た材料を利用して元史の缺陷を満すことゝなつた。

此等が支那に於て、元史の研究の盛となつた重なる原因であらう。兎に角元史研究の開祖ともいふべき錢大昕以來、元史研究に手を着けた學者が中

々多い。『元史譯文證補』の著者として盛名ある洪鈞は夙に世を去つても、今猶ほ『蒙古源流』の穿鑿に没頭して居る沈曾植がある。『蒙兀兒史記』の著者の屠寄も居る。柯劭忞も亦支那に現存する元史研究者の一人である。

二 柯劭忞は山東膠州の人で、嘗て京師大學堂の經科大學長の任に在つたかと記憶する。また國史館纂修の職に就いたこともある。支那では錚々たる學者の一人と認めねばならぬ。先年洪鈞の『元史譯文證補』の缺を補ふ目的で『蓋略圖補傳』を著した。蓋略圖とは旭烈兀の孫のガイカト Gaiyuk Khan のことで、第五代の伊兒汗である。また『新元史』の著作に従ひ、既に太祖、太宗、定宗、憲宗四代の本紀を公にした。この『新元史帖木兒傳』も、その名の示す如く、『新元史』の一部である。『新元史帖木兒傳』は僅々九枚に、亞細亞征服者として名高い、帖木兒 Timur の傳を記したもので、

その間に何等の新事實をも認め難い。太祖、太宗等の本紀には皆考證を附録し、那珂博士の『成吉思汗實錄』、洪鈞の『元史譯文證補』を始め、諸書を引用して、異同を挙げ、根據を示してあるから學者の參考にも供し得るが、この帖木兒傳に限つて、その考證すら省いてある。外國の書籍を利用して、その支那人には、多少の裨益を與へ得るが、一般の學界には餘り貢獻する所がない。従つて特に本欄に收めて批評を加へる程の價値を認めが、新來の史籍であるから、紹介旁こゝに畧評を試みることにした。

三 (一) 西曆千三百六十年の頃、西察合台汗國に内亂の起つたのを好機として、東察合台汗國の主なるツグルク・テムール Tughluk Timur が、西察合台汗國征服の爲め出兵した事實を記した。

德克爾克齊穆爾汗率師來援

とあるが、德克爾克齊穆爾のことは、この以前に

本書に一字隻句も書いてない。何者で何處から出て來たのか一切不明で、記事誠に唐突の嫌がある。是非その前に東西察合台汗國の關係を述べ、又彼が察合台の後王であることも一言して置かねばならぬ。來援の二字は當時の事實に適せぬ様である。(二)ツグルクニチムールが西察合台汗國を征服した後の事情を記して

義利阿斯赫憂之子、義利亞斯與帖木兒不協とあるのも無論間違つて居る。ツグルクニチムールの子がイリアスニクワジャ Elias Khwaja で、帖木兒と不和を醸したのはこの人である。柯劭忞に据ると、ツグルクニチムールの子が義利阿斯赫憂で、更にその子の義利亞斯といふ者が帖木兒と不和を生じたこととなつて、頗る實際と相違して居る。第一ツグルクニチムールの孫に義利亞斯といふ人があつたことから疑はしい。柯劭忞は一人のイリアスニクワジャを父の義利阿斯赫憂と、子

の義利阿斯とに分けた様に思はれる。果して然りとせば、誠に沙汰の限りである。(二)帖木兒が波斯を伐つて、バグダード Baghdad へ入つた時のことを記して、

巴克達爲天方教祖國。至是三爲蒙古人所踣。

とあるが、バグダードは天方教即ちイスラム教の祖國とはいへぬ。祖國といへばメッカ Mecca であらう。現に『明史』には天方の一名を默伽としてある。バグダードはアツバス Abbas 王朝時代にイスラム教國の首都ではあつたが、帖木兒の時代には、哈利發(イスラム教皇)は埃及に移つて、バグダードはチャラーイリド Jalairid 王家の手に在つたのである。至是三爲蒙古人所踣とあるのも記事唐突で且つ間違つて居る。バグダードは西曆千二百五十八年に蒙古の旭烈兀に陥られ、西曆千三百九十二年(回曆七九五)と千四百一年の兩

度帖木兒に取られた。三爲蒙古人所躡とは事實として、柯劭忞の記事は帖木兒の第一回のバグダード攻陥のこと即ち西曆千三百九十二年のことを述べたのであるから、至是二爲蒙古人所躡とはいへぬ。最後にバグダードを陥れたのはその後の出来事である。

(四)帖木兒の印度征伐の記事に

鐵利城者。印度杜兒拉克王。斯爾坦瑪穆士之都城也。

とある杜兒拉克は杜克拉克の誤であらう。然らずばトグラク Toghlak (Tughlak) の音を表はすに十分である。また瑪穆士は勿論瑪穆士の誤で、マームード Mahmud の音を表はしたものと見ねばならぬが、通篇悉く瑪穆士と誤つて居るのは、不注意千萬といはねばならぬ。

(五)蒙古三大汗國。帖木兒滅其二。惟尢赤之後。僅有存者」とある、其二とは無論、伊兒汗國と察

合台汗國ガダイカンとを指したものであるが、西察合台汗國は成程帖木兒に滅ぼされたとしても、東察合台汗國は、帖木兒の主權をこそ認められ、決して滅ばされたのではない。帖木兒の死後も、依然東察合台汗國は繼續して居る。

(六)帖木兒の死後、その位を承けたのは、孫のビルムハメツド Pir Muhammad である。柯劭忞がこの事實を

〔帖木兒〕遺命以_ニ其子卑爾摩哈馬德_一爲_レ嗣

と記して居るのは間違つて居る。『明史』には其〔帖木兒〕孫哈里嗣とあるのが即ちビルムハメツドのことで、哈里は或はビルを訛つたものかも知れぬ。ビルムハメツドは帖木兒の長子ジャハンギル Jahan-gi の子で、即ち帖木兒の嫡孫であるジャハンギルの弟に有名なシャールック Shah Rukh がある。ヘラート Herat 地方を領した。『明史』に

撒馬兒罕酋、哈里者、哈烈酋〔沙合魯〕兄子也

とあるのが、よく事實を得て居る。

(七) 柯劭忞は外國の固有名詞に對して、任意に漢字を當て、支那文献上慣用されて居る字面は餘り使用せぬ。例へば帖木兒の産地は誰人も知る如く、ケシユ *Keshu* である。元代の『西游記』には碣石の字を當て、『明史』には渴石の字を用ひてある。柯劭忞は基杜戍の字を當て、居るが、基杜戍の音は渴石や碣石に比して、遙にケシユの音に適合せぬ。バグダードに巴克達の字を當て、オトラル *Otrar* に窩德拉爾の字を當てたのは毫も不都合ないが、元代に慣用した八吉打ハクダや幹脫羅兒カンダラールを用ひてもよい。割注にでも書き添へて置くなら用意一層周到と思ふ。

(八) 帖木兒は殺伐な征服者ではあるが、一面頗る文雅な所もある。地理や歴史に大なる興味を有し蒙古、土耳其、波斯の言語に通じて居つた。また文筆の嗜もあつて、彼自身の自叙傳をも後世に遺

して居る。彼の建てた制度文物に觀るべきものが頗る多い。學者や美術家に對しては相當の保護を與へて居る。帖木兒の建てた所謂帖木兒王家 *Timurids* 時代は、中央亞細亞の文化史上、尤も重要な一時期と認められて居る。柯劭忞が折角帖木兒を傳しながら、この文明的方面に、一言隻句も説き及んでないのは遺憾千萬といはねばならぬ。

(三月七日)

『朝鮮古蹟圖譜』(二冊)

朝鮮總督府刊行

文學士 今西 龍

遺物遺蹟は實に國家が所有する名譽ある富なり貯蓄なり、其顯揚と保存とを計らざるべからざること論なし。而して朝鮮半島に於ける遺物遺蹟は之を學藝の方面より觀るも、單に朝鮮の藝術文化を説明するのみならず、日本支那のそれを説明し